
君が必要

大川 賢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君が必要

【Nコード】

N0120A

【作者名】

大川 賢

【あらすじ】

生きる楽しさを忘れて苦しむ和典。しかし恵の存在によって少しずつ生きたいと思うようになる。お互いが素直になれず、すれ違いを繰り返しながら頑張って生きていく。感動の結末が…。今何がしたいのか分からない。そんなあなたに是非読んで欲しいです。

第一話

命って何？ 行ってるって何？ 人間って何？ …

「はあ…」

今日もまたである。

布団に入ると毎晩のように自分の中から聞こえてくるこの声。

… 静まりかえった部屋がいつそう虚しさを… あっ申し遅れたが

私は都内の出版社に勤務している26歳のサラリーマンである。

私はこの26年間彼女というものがいない。

誤解されるといけないので言っておくが決して人を好きにならないわけでもない。

しかしこのぱつとしない容姿のせいはいまいち自分に自信がない。

学生時代からそうだった。

彼女に限った事ではなく人付き合いが得意な方ではなかった。

成績は良かったが特に目立つわけでなく、イジメられてはいないが特に名を挙げられる親友がいたわけでもなかった。

クラスメートといえばテスト前になるとノートを貸して、あとは学級委員の推薦の時声をかけられるぐらいの付き合いだった。

親に期待され、自分が何をしたらいいのかもわからず頑張っている高校、いい大学に入り、世間では一応知らない人がいない程度の会社には就職した。

仕事にやりがいがないわけではない。

給料に不満があるわけでもない。

死ぬ程彼女が欲しいというわけでもない。

だが毎晩もう一人の自分、そう、あの質問を投げ掛けてくるアイツが顔を出す。

そんな時だった。ふとつけたテレビの中である男が言っていた。「

人間は自信を持つこと、つまり誰かに必要とされていると感じる事
や、何でも

いいから打ち込める事を見つけることで生きる楽しさを知る、生き
たいと…」

ポチッ！そこで消した。「ふんっ！精神カウンセラーかなんか知ら
ねえけどお前に何がわかるんだよっ！」

そう叫びおもいきり壁を殴った。ドンッ！と音をたてて写真たてが
落ちた。

「ふうーっ」ひと息ついた。再び静けさが部屋を支配する。怒っ
てはみたものの

よく考えるとそうなのかもしれない。

いつか母が言っていた事を思い出した。

「和典はねえ、ちっちゃい頃はねえ、みんなを和ませる力があつた
の。

みんなが和君遊ぼう、遊ぼうって来てくれたのよ。あんた寂しが
りやでねえ、

誰かそばにいないと気がすまないのよ。お母さん洗濯物ひとつ干す
のも大変

だったんだから。」
嬉しそうにそう言い、まだ湯気のたっているお茶をすすり、微笑ん
でいた。

その時は恥ずかしさもあり、「小さい頃の話なんてどうでもいいだ
ろ」

と相手にしなかったがよく考えると確かにそうだ。こんなことを言
うのは

恥ずかしいが自分は寂しがりやだ。何かに触れていたい、人と接し
ていたい。

心の中ではそう思っているのだ、でもそれを行動表したり、まして

や言える程

器用ではない。

でも少しだけ前向きになった気がする。時計はもう12時をまわっている。

「寝るかっ」 そう呟くと目をつむった。 いつもより早く目が覚めた。グツとコーヒーを飲み、会社に向かった。

いつもより15分早いバスに乗った。

時計に何度目をやってもやはり早いものは早い。でも悪い気はしなかった。

「ピンポン」いつもより一駅前で降りることにした。この辺を歩いたことは

あまりないかもしれない。何かすがすがしい気分だった。

朝礼も終わり、パソコンに向かう。

「はい、どうぞ」 恵がお茶を持ってきた。

恵はすっとした顔立ちにくりくりのはっきりした目、栗色の長い髪が良く似合う

わが社のアイドルだ。

「先輩、今日歩いてましたよね？どうしたんですかあ？」
きよとんとした表情で覗き込む。

「いやあ、少し早く家を出てしまってね」

軽く微笑み返した。心臓の音が恵に聞こえたかと思うほど脈打った。言うまでもないが、影ながら私も恵フアンの一人だ。

今日自分はひとつの決意をしていた。人生初の試みである。

「ねえ、おいしい焼き鳥見つけたんだけど行かないかなあ？」 思ったよりすらすらと言えた。

「すみません。今日用事があるので」

「いやいやっ、気にしなくていいよっ」 必死で平静を装おった。

恵はペコリとおじぎをし、立ち去った。期待していたわけではないが、やはり少し辛い。

やはり少しだけ出てきていた前向きさが音をたててつぶれた。

ふと秀樹のヒソヒソ声が聞こえた。「恵、今日7時半なっ」
恵は表情を変えず、さりげなくお茶を置きながら、秀樹にだけ聞こえる声でボソツと

「はい」と答え、立ち去った。遠くで聞こえる「部長お茶でえす」という恵の声を聞きながら呆然とした

秀樹は背も高く、顔立ちも女性なら心を奪われても当然の甘いマスクを持っている。

確かに、恵と秀樹……美男美女のお似合いカップルだ。

逆立ちしたって秀樹にはかなわない。その後の事はよく覚えていない。

それなりに仕事をこなしたのだろう（笑）

仕事の帰り一人でラーメンを食べた。冷たい体にスープがしみる。

早めに布団に入った。またあの声が聞こえてくる……

私は何て弱い人間なんだっ！！泣きながら眠った。

ここまで自分で自分が誰かを好きになっっているのを自覚したのは初めてだった。

今までは自分には無理だ……と、そう相手より自分が先にたっっていた。

でも今度は違う。自分には無理。そんな事関係ないっ！

恵が好きだっ！心から好きだっ！

世界中で誰にも負けない程恵を愛している！

だがこの思いは伝わらない。

鏡を眺めた。顔……これによって人の人生はどのくらい変わるだろうか。

自分の顔が秀樹の顔だったら……母を恨んだ。

半年後……「おはようございます」今日もまた一日が始まった。恵の置くお茶にもいつしか氷が入っている。

季節は冬から夏へ変わったが自分は相変わらず変わっていない。自分は弱い人間だ。自分の顔を恨みながら生きている。

でもこの半年間少し成長した。

今まで時々思っていた生きる意味なんて…死にたいという気持ちはなくなってきた。

2ヶ月前課長から言われた一言。

「今度の新人作家のデビュー作うちの会社から出せるかもしれん。そうだったら和典君、君にこのプロジェクトを任せるよ。」

このプロジェクト、この会社に君は必要だ！」

何とも言えないこの気持ち。ふとよみがえるあの男の一言。

「人は誰かに必要とされていると感じることで生きる楽しさを知る」そんな事どうでもよかった。

布団に入るともうひとりの自分の声はまだ聞こえる事もあるが今まで以上に

仕事が楽しくなっている事は確かだ。

そういうわけで「この2ヶ月間また少し自分の弱さが消えていた。

「お茶です。」 恵の声

「先輩そのネクタイいいですねっ」

お茶を置きながら意味ありげに微笑む恵。

「ありがとう」軽く答えた。

正直褒められた嬉しさより、秀樹という男がいながら他の男をその気に

させるような発言をする恵に対して何とも言えない気持ちさがこみ上げ切なさが溢れた。

その気がないのなら冷たくしてほしい！ほっておいしてほしい！その気持ちのほうが強かった。

チャイムがなり昼休みだ。

最近セルフうどんなんてお店が出てきた。サラリーマンの強い味方だ。

安くても味は悪くないし、野菜や肉も乗せてバランスもいい。独り暮らしはこういうところで栄養を取らな…などと考えつつ

ざるうどんと芋の天ぷらを取り、ソースをかけていると後ろから「先輩一人ですか？」聞きなれた声。…恵と向かいあって座った。

第一話（後書き）

少しでも多くの人からの感想をお待ちしています。

第二部（前書き）

久しぶりに投稿してみます

感想いただけたら嬉しいです

第二部

というか恵が座ってきたというほうが正確だ。

会社の合コンなど誘われた事のない私は今まで母親以外の女性と向かいあつて座るなんて事はなかった。顔を合わせないようひたすらうどんをすすった。

「先輩はよくここ来るんですか？」「うんまあね」

「君は？」

「君だなんて先輩（笑）恵でいいですよ」
今まで私は恵を名前で呼んだ事はなかった。前焼き鳥屋に誘った時もそうだった。

「私ここ初めてです。いつもはお弁当なんですけど今日は材料がなくて。昨日は残業で仕事終わったらもうスーパー閉まつてて」
「やっちゃったという風にペロツと舌を出して笑いながら言う恵。」

ドキドキしながら下を向いてうどんを食べる恵を見た。
その愛くるしい姿に自分の顔が赤らんでいくのがわかり急いで水を飲んだ。

「先輩こんなのばっかじゃ体に悪いですよ。あっ！私お弁当作つてあげましょうか？」

少しおどけた口調で言う恵。ドキッとしたが秀樹の顔が浮かんだ。
私は

「いいよ」

と少しぶっきらぼうに言った。

秀樹に悪いと思つたわけではない。

ただ秀樹という彼氏がいながら他の男にこういう事を言う恵が信じられず、腹が立った。

恵を魔性の女と見るもう

一人の自分がいた。

恵も自分の態度に少し動揺したように見えた。

私はもともと怒る事はめったにない。

というか今まで誰かに手を挙げたり怒鳴ったりしたという記憶はない。

先に店を出ていった恵。

この30分楽しくないわけではなかった。

しかしやはり抑えきれない怒りがそれを打ち消した。

確かに恵の存在によつて自分は強くなれた。

でも……

今日は終業式。

小学生は今日から夏休みだ。今日もうどんだ。のれんをくぐると向こうから

「先輩」

と手を振る恵。

恵が2日続けてうどんとは。

しかも会社から少し離れたこの場所まで。

たわいのない会話で時間は過ぎていった。

うどんもおおかた食べ終わった頃彼女はふと言った。

「私ってすごい弱い人間なの、先の事はっかり考えるの……例えば気の合う友達が出来てもその子が引く越す事がわかってるとするでしょう。したらもうその子とは距離をおいて付き合っの。仲良くなると別れがツライから。一線を引くの……。すべてにおいてそう。先の事はっかり考えて疲れちゃっの……」

私は思つたままを言った。

「いや君は強いよ、そうやって先を考えて自分の感情を制すること出来るんだから。僕にはそれは出来ない。僕だったら何も考えずただ付き合っ。それで後で凄く落ち込む。僕こそ弱い人間だよ……時間ないから帰ろっ。」

それから数回秀樹と

恵の約束を耳にした。

しかし必ず自分の所にお茶を持って来るとちよつとした事で声をかける。

その度に悲しみと怒りがこみあげた。

私ばかりかわれている。

女の免疫のない私を遊んで楽しんでいるのだと。

それから昼を共にする事は多かった。

でも恵はその度に今日はなにになんでここで食べますと理由をつけた。

そんなある日私は産まれて初めて人に怒った。

というか怒鳴り散らした！！机を叩き叫んだ。

それは自分の怒りもピークに差し掛かろう

としていた時だった。恵が気軽に

「先輩って手キレイですよねえ」

と触ってきた。

私は無意識の内にさつと

手を引つ込めた。

「やめろっ！君がそんなに軽い女だと思わなかったよ！そうやって

男を遊びの道具のように扱う女だとはねっ！！君は…最低だよ……

最低だよっ！！！！秀樹という男がいながら！！」

おもいきり机を拳で叩き怒鳴った。

店の空気が固まった。そんな事どうでもよかった。

「違い…辞めて…下…さい…私は…純粹に……」

わんわんと泣きながら声にならない声で恵は言った。しかし私は続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0120a/>

君が必要

2010年10月9日03時38分発行